二〇一二年六月二十二日　開催

英語落語の世界——Let's Try English Rakugo!

須藤達也

■講演者……須藤達也（本学非常勤講師）
■司　会……桝本智子

二〇一二年六月二十二日に、本学ミレニアムホール（5号館）にて、「英語落語の世界——Let's Try English Rakugo!」と題した講演と、公演を行なった。

第1部では、パワーポイントを用いながら、落語および英語落語について英語で解説した。英語落語については、歴史的背景だけでなく、英語教育への応用の可能性や、西洋文学との関連についても触れた。また、私が最近始めた「椅子落語」を実演し、英語落語の新しい可能性についても言及した。「椅子落語」とは文字通り、座布団ではなく、椅子に座って演じる落語である。

「英語小噺（こばなし）」チャレンジや、質疑応答の時間ももうけ、小噺には本学国際コミュニケーション学科語学専任講師の神崎正哉先生や、英米語学科通訳・翻訳課程の学生、ハローワークの生徒らが挑戦してくれた。質疑応答では、英米語学科専任講師の柴原智幸先生をはじめ、多くの方々から落語につい

須藤達也先生

解説する須藤達也先生

ての質問を受けた。

第2部は、着物に着替えて、“Beer Drinking Bet”（「ビールの賭け飲み」）と“The Other End”（「片棒」）を演じた。

この稿では、主に第1部で話したことを書いていくが、まずは、私がどのように落語の世界に関わるようになったかを、三人の人物、すなわち、立川談志、上方の桂枝雀、明治期のイギリス人落語家・快楽亭ブラック（本名、ヘンリー・ブラック）に焦点を当てて、説明したい。

立川談志（一九三六〜二〇一一）

一九八三年、立川談志は、落語家の真打制度をめぐって落語協会と対立し、脱会した。当時、落語協会の会長を務めていた柳家小さん（五代目、一九一五〜二〇〇二）は、談志の師匠でもある。その師匠と袂を分かつのは大変な決断だったに違いない。協会を離れれば、都内に四軒ある寄席に出られない。落語家にとってこれは大きな損失で、それを覚悟することは、弟子にとっても大きな決断だっただろう。

ともあれ、この年、「落語立川流」が誕生した。落語家だけでなく、他の芸能人や一般の人にも解放したこの流派に、ビートたけし、高田文夫らが賛同した。漫画家の手塚治虫、小説家の色川武大、作曲家の山口洋子ら、錚々たる名士たちも協力者として名を連ねている。表現は悪いかもしれないが、私は、これは面白いことになったと思い、すぐさま立川流に参加した。これが、私が落語界に関わるきっかけである。

なぜ、立川流に参加したか。それは、「落語は業の肯定である」という談志の落語観に共鳴したからである。「業の肯定」とは何か。それを彼は赤穂浪士の事件を引き合いに出して説明する。討ち入りに参加したのは四十七人だが、浅野家には実際は五百人を超える武士がおり、大半が討ち入りに参加していない。討ち入りに参加した大石蔵之助たちは、その立派な行動ともに後世にも名を残し、講談でも語り継がれる。でも、すべての人がいつも立派な行動がとれるわけではない。主君への忠誠よりも家族が、あるいは恋人が大切な人もいるだろう。討ち入りの後に待っている切腹が嫌な人もいるだろう。でも、そういった人たちの行動こそが、いわば人間の「業」であって、それを肯定するのが落語だというのだ。

プレーヤーでありながら、こんな冷静な分析をするなんて、どんな人なんだろう。この人の近くにいて話を聞きたい、そう思ったのである。談志の落語論は、この後「落語はイリュージョンである」というふうにさらに展開していくが、ＪＡＬＴ（全国語学教育学会）や、今回の講演で、談志の落語論を紹介できたことをうれしく思っている。

桂枝雀（一九三九〜一九九九）

英語落語を語るとき、まずは枝雀の話からしなくてはならない。枝雀は上方落語界のスーパースターだった。今でも新宿紀伊國屋書店の二階にあるCDショップ、ミュージック・テイトや銀座の山野楽器に行くと、枝雀のCDとDVDがずらりと並んでいる。同じ量のCDやDVDが置いてあるのは、上方では枝雀の師匠である桂米朝くらいのものだ。亡くなってから十年以上が経つというのにこの人気はすごい。法政大学で江戸文学を教えている田中裕子教授は、授業でさまざまな落語家の落語を学生に聞かせているが、学生から圧倒的に支持されるのは枝雀なのだそうだ。

枝雀は若いころ、英語の教師か、落語家になることを志していた。高校生のころからほぼ落語家になることを決めていたようだが、大学を中退して落語家になることを決めた後も英語への思いは強く、それが後の英語落語につながった。一九八二年のことである。

当初、枝雀の英語落語はぎこちなく、落語を英語でやることへの疑問もあった。だが、一九九〇年に有楽町のマリオンで彼の生の英語落語を見たとき、この落語家のすごさを思い知らされた。会場にいた日本人も外国人も一様に彼が演じる「動物園」に引き込まれ、笑いが絶えなかった。継続は力なり。続けていれば形になる。私がいま英語落語をやっているのは、このときの経験があるからだ。

一九八八年に彼が書いた『枝雀のアクション英語高座』（祥伝社）は、なかなかの名著だ。英語落語がどのように訳され、演じられたかを書いた本だが、比較文化論としても読める。言葉を訳すことは容易ではないが、背景にある文化を訳すことはさらに難しい。そんなことがよくわかる本だ。現在は『落語で英会話』（祥伝社黄金文庫）のタイトルで出されているので、英語落語に興味ある方は、ぜひ一度手にとって見ていただきたい。

残念ながら枝雀は、うつ病ために一九九九年にこの世を去ってしまったが、英語落語の精神は、桂かい枝、桂あさ吉、桂三輝（カナダ人で桂三枝の弟子）ら、何人かの上方の落語家さん、そして私にも確実に受け継がれている。

快楽亭ブラック（一八五八〜一九二三）

ブラックは英語でなく、日本語で落語を演じていたので、英語落語の範疇に入る人ではないが、国境を越えて自国の文化を表現しようとした点で英語落語に通ずるものがあり、外国人の前で英語落語をやるとき、私は必ず快楽亭ブラックの話をするようにしている。

オーストラリア生まれのイギリス人、ヘンリー・ブラックは父親の仕事の都合で六歳の時に来日した。父親のジョン・

ブラックは、明治初期に日本で新聞を創刊した名高い人物である。息子のヘンリーは、落語や講談、歌舞伎など、日本文化に興味を持ち、やがて自分でも演じるようになった。さらに近代落語の開祖と言われる三遊亭円朝（一八三九～一九〇〇）の影響もあり、創作を手掛けるようになった。代表作に「ビールの賭け飲み」があるが、これは後に「試し酒」に改作され、現在でも多くの落語家によって演じられている。

「ビールの賭け飲み」もそうだが、ブラックは西洋を背景にした話に日本人を登場させて物語を構成した。ちくま文庫から出ている『快楽亭ブラック集』には探偵小説が四編掲載されているが、それらも同様の手法で書き、寄席で演じていた。

ブラックは、日本初のレコードプロデューサーとしても活躍し、一九〇三年に二七三タイトルのレコードを出すのに尽力した。これらのレコードは長らく所在が不明だったが、二〇〇〇年にイギリスのレコード会社で発見され、二〇〇一年に十枚組のCD集「全集日本吹込み事始め」として東芝EMIから復刻された。この全集には、快楽亭ブラック自身の小品も七編録音されており、彼の肉声を聞くことができる。これは非常に貴重な記録だ。

残念ながら「ビールの賭け飲み」は全集に入っていないが、活字は『明治大正落語集成 第一巻』（講談社）と、落語評論家の小島貞二が書いた『快楽亭ブラック』（国際情報社）に残されている。私はこれを英語に訳して、数年前から何度か演じている。今回も、二席のうち、一席はこの作品を選んだ。

同じイギリス人で、やはり日本文化にのめり込んだラフカディオ・ハーン（小泉八雲、一八五〇～一九〇四）に比べて、ブラックの知名度は低い。「快楽亭ブラック」は『美味しんぼ』という漫画に何度か出てくるので、漫画ファンの中にはこのシリーズを通して知っている人がいるようだが、アメリカ人で料理の専門家という設定なので、事実と異なる。また、漫画のキャラクターなので、ほとんどの読者は実在の人物だと思っていない。私は英語落語を通して、快楽亭ブラックを日本とイギリス、そして彼が生まれたオーストラリアで紹介

快楽亭ブラック
（『快楽亭ブラック』講談社、1992年より）

していきたいと思っている。

落語と西洋文学

ブラックの「ビールの賭け飲み」は、ビールを十五本飲めると豪語する男が、そんなに飲めるわけがないとする人と賭けをする話である。豪語した男は、賭けをする前に少し時間をくれと言って外に出て、一時間ほど相手を待たせる。この賭けは、豪語した男が勝つのだが、相手は待たされた一時間に何かあったのではないかといぶかる。話の最後で、男は待たせた理由をこう答える。「十五本、飲めるか飲めないかわからなかったんで、ちょっと横町のビアホールに行って、試しに十五本飲んでまいりました」……。

見事な「落ち」である。前述したように、今はビールが日本酒に変えられ、「試し酒」の演題で演じられている。「ビールの賭け飲み」の原典は特定できていないが、『明治大正落語集成　第一巻』では「英国の落とし話」として紹介されているので、イギリスの話が原典であることは間違いない。イギリス文学、あるいはユーモア文学の専門家に聞いてみたいとかねがね思っている。

ブラックと親しい関係にあった、三遊亭円朝も、西洋の物語を取り入れるのに積極的な噺家で、モーパッサンの「親殺し」を「名人長二」という落語に翻案している。この他、有名なところでは、グリム童話の“Godfather Death”（「死神の名付け親」）をベースとした「死神」という落語がある。また、「動物園」という作品は、おそらく、英語の“Zoo Performer”（「動物園の役者」）という物語に着想を得たものだろうと考えられている。

英語落語の可能性

講演の途中、私は椅子に座って、“WHAT!”（「あらま！」）という短編を落語形式で演じた。落語形式というのは、いわゆる上下（かみしも）（右を向いたり左を向いて話すこと）を切ったり、落語で用いる所作を活用した、という意味である。

素材は、英語の絵本からとった。カナダ人の女性絵本作家、Kate Lumの“WHAT! CRIED GRANNY : An Almost Bedtime Story”（PUFFIN BOOKS）を読んだとき、話の構成がまるで落語なので、落語の形式で演じられると直感した。だが、どう演じるべきだろうか。もともと英語圏の話を座布団の上で着物を着て演じる必要があるだろうか。むしろ不自然だ。

そこで、最近、噺家の柳家花緑（やなぎやかろく）が新作落語を演じる場合に、椅子に座って背広姿で演じていることに習い、椅子で演じることにしたのである。落語が世界に広がらないのは、一つには正座で演じることに対する外国人の抵抗感があるからだ。

このスタイルであれば、ある種の一人芝居の形式として、世界に広がる可能性もある。

英米、ひいては世界のユーモア文学を落語形式に置き換えて、「椅子落語」で演じてみる。それによって英語落語のレパートリーが広がり、さらにそれが日本語に訳されれば、日本語落語のレパートリーも広がる。そう考えていくと、英語落語の可能性は無限大といっていい。

英語教育に生かす

さらに、英語教育への活用、という観点から英語落語をとらえることもできる。ヒントになるのは、國弘正雄が『英語の話しかた』(サイマル出版会)で提示した「只管朗読」と、松本亨が『英語と私』(英友社)で示した Self Conversation (自己会話)という考え方である。

國弘は、英語をマスターするには何度も何度も声に出して読むことが重要だと主張した。お坊さんが、ただひたすらに座禅をして修業する「只管打座」という言葉にならって、その学習法を只管朗読、と名付けたのである。また、戦時中、英語が「敵性語」であった時期に英語を学んだ松本は、英語を話す相手もおらず、そこで考えたのが、自分が、親や兄弟など、いくつかの役を演じて英語を一人語りする練習方法だった。これはまさしく落語である。

落語の場合は話を暗記して演じるので、何度も声に出して練習する必要がある。英語落語はまさに、この二人の英語教育の巨匠が述べたことを実践するものといっていい。実際に授業で英語落語をやらないとしても、この二つのアイディアを生かした学習法は、学生に何かしらのヒントを与えるであろう。

落語を英語に訳す楽しみ

日本語のジョークは、「謎かけ」に代表されるように「地口」が多い。つまり、かけ言葉で笑わせる。これを英語に訳すのは不可能なので、かけ言葉が最後の落ちになっている「道具屋」や「道灌」などは英語にならない。でも、噺の途中で出てくるジョークであれば、他のものに置き換えることはできる。たとえば、「まんじゅうこわい」に出てくる「まんじゅうでアン殺だ」は訳せないが、私はこの噺自体を「ハンバーガーこわい」にして、チキンバーガーの「チキン」と臆病者の「チキン」をかけたジョークを織り込んでいる。

参加者も挑戦

「厩火事」という落語には、こんなやりとりがある。

「孔子さまは二頭の馬を持っていて、特に白馬をお愛しになった」

「へえ、そうですか。うちの人もあれが好きなんですよ。特に冬はあったまっていいって」

「おいおい、白馬ったって、どぶろくのことじゃないよ」

ここは英語でも、白馬とウィスキーのホワイトホースを掛けたジョークを仕立てることができる。

落語を英語に訳すのは大変でしょう、とよく言われるが、訳す作業には言葉を訳すだけでなく、アイディアを訳す楽しみもあって、大変なことばかりでもない。台本を工夫する楽しみ。これもまた、英語落語の魅力だ。こういったアレンジを少し加えていけば、古典落語を何語でやってもその面白さは絶対に伝わると私は確信している。

以上、落語と英語落語について縷々綴ってきたが、英語学習者が、英語落語から英語の面白さや楽しさを感じていただければこれにまさる喜びはない。私が高座名を「英楽」としているのは、一つは「英語落語」の言葉遊びだが、それ以上に、学習者に英語を楽しんで欲しい、という気持ちを込めているからである。今回の講演でも、そんな思いを込めて話をさせていただいた。